

# 近隣観光地への訪問意向に影響を与える要因の考察

—大学生を対象としたアンケート調査の結果から—

A Study on Travelers' Intention to Visit Sightseeing Areas and Its Factors

山本真嗣

YAMAMOTO Masahide

## 目次

1. 課題と研究方法
2. 先行研究と調査
3. アンケート調査の結果
4. 考察
5. 今後の課題

キーワード：観光行動, 訪問意向, 能登

## 1. 課題と研究方法

### (1) 課題設定

潜在的旅行者である人々が、実際にある観光地を訪問するには、事前にクリアすべきいくつかのハードルが存在する。例えば、当人がその観光地の存在を知っていること、その上で現地を訪れたいとの意向をもつこと、さらに訪問というアクションを起こすこと等が挙げられる。

近年、地方公共団体等による地域経済活性化の取り組みの一方策として、地域観光の振興が熱い視線を集めてきており、観光産業の活性化がクローズアップされることが増えてきた。

その一方で、観光客を効果的に集客するための方法論については、まだ発展途上の段階にある。効果的かつ効率的な集客拡大のためには、旅行者が何に関心を示し、何によって観光地訪問というアクションが引き起こされるのか、旅行先の選択に影響を及ぼすファクターは何か、等を探る必要がある。当研究では、アンケート調査をもとに、潜在的旅行者の訪問意向に影響を及ぼす因子について検討した。それにより人々が特定の観光地に訪れたいようになるためにはどういった条件が満たされなければならないのか、その手がかりを得ることを目指す。

### (2) 研究方法

上述した課題を達成すべく、大学生を対象にアンケート調査を実施した。アンケートの集計結果をもとに、相関分

析等によって旅行予定者の訪問意向に影響を与える因子を析出した。

訪問意向の有無を尋ねる上での具体的な訪問先として能登地方を措定し、調査対象者それぞれの同地方への関心の度合いやエリア内の観光地をどの程度知っているかなどを尋ね、訪問意向との関連を調べた。

一般に、旅行先が遠方になるほど、周遊型（ラケット型）や広域型の観光行動が観察されやすくなる傾向にある。ここでは、比較的単純であると考えられる、近隣観光地を対象とした観光行動について考察する。

## 2. 先行研究と調査

旅行先の選択に影響する要因についての先行研究として、八城薫・小口孝司（2003）がある。八城らは、東京都内の大学に通う18歳から23歳までの女子大学生98名を対象として観光地選好に関するアンケート調査を行った。どのような観光地に行きたいかという各質問項目に「当てはまる」または「非常に当てはまる」と回答した人の割合を肯定率として集計した結果、最も肯定率が高かったのは、「温泉地があるところ」（86.7%）、「暖かいところ」（83.7%）、「海があるところ」（77.3%）などの自然環境に関する要素であった。また、人工的環境に関する要素としては、「遺跡があるところ」（68.4%）、「テーマパークがあるところ」（62.2%）、「史跡があるところ」（57.1%）などが高い肯定率となったという。

この調査結果は、対象が女子大学生に限定されているものの、訪問先における行動の選択肢の豊富さや観光資源・観光施設の集積が集客に有利となりうることを示唆しているものと考えられる。

同様に、内閣府が2003年におこなった世論調査によると、今後（1年くらいの間）、観光、レクリエーション、スポーツなどのために「国内旅行はしたいが、海外旅行はしたいとは思わない」、「国内旅行も海外旅行もしたい」と答えた者（1,570人）に、したいと思っている国内旅行の主な目的は何であるかを聞いたところ、上位は以下の結果となった（複数回答、上位4項目）。

「美しい自然・風景（山、川、滝、海、自然公園等）を見る」（65.0%）

「温泉での休養」（60.1%）

「旅行先の土地の郷土色豊かな料理等を食べる」（42.5%）

「史跡・文化財・博物館・美術館などを巡り鑑賞する」（34.8%）

同調査では、国内旅行先での主な行動についても尋ねている。最近（この1年くらいの間）、観光、レクリエーション、スポーツなどのための1泊以上の国内旅行に行ったとした者（1,142人）に、その旅行先での主な行動はどのようなものであったかとの問いに対して、結果は以下の通りであった（複数回答、上位4項目）。

「美しい自然・風景（山、川、滝、海、自然公園等）を見る」（61.1%）

「温泉での休養」（54.5%）

「旅行先の土地の郷土色豊かな料理等を食べる」（36.0%）

「史跡・文化財・博物館・美術館などを巡り鑑賞する」（31.9%）

以上の結果から、旅行者が観光地を訪問する際には、複数の目的に基づいていることが少なくなく、実際の行動も概ねそれに沿ったものであることが推察される。

これらの研究および調査は、旅行者が訪問先の選定に関してどのような要素を考慮するのかを明らかにしたという点において、意義を認めることができる。しかし、それらの要素が旅行者の訪問意向にどの程度影響しているのかは、依然として不透明なままである。

### 3. アンケート調査の結果

#### (1) 調査方法

アンケート調査は、観光系科目を受講する大学生を対象に、2014年7月22～24日に実施した。実施日の出席者数272名に対して、回答者数は202名（男性70名、女性131名、不明1名）であった。質問は、大きく6つの項目からなっており、無記名とした。

#### (2) 質問項目と回答結果

第1の質問は、能登エリアの観光資源やグルメ等についての関心を問うもので、「関心がある」を1、「ない」は5、の5段階とした。図-1は、全回答の平均をプロットしたものである。設定した5項目のうち、比較的グルメや温泉などの旅の楽しみに関する部分に対する関心が高かったことが見て取れる。

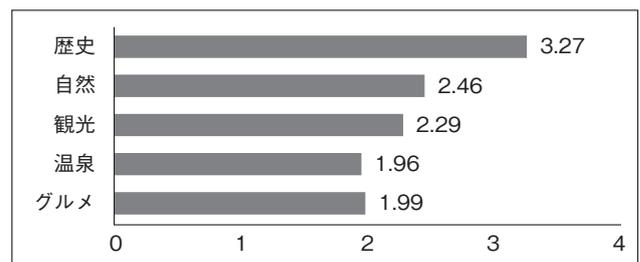


図-1 能登エリアの観光資源等への関心

第2の質問では、能登エリアを訪問したことがあるかどうか、あるいは住んでいる（いた）かどうかを尋ねた。それによると約67%の学生（135名）が、能登エリアを訪問したことがあると回答した（「ない」は28%）。なお、ここでいう「能登エリア」とは、石川県内における宝達志水町から北の地域を指しており、かほく市、内灘町、津幡町、氷見市は含まないこととした。

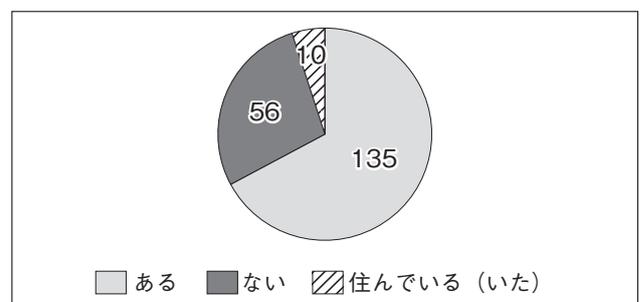


図-2 能登エリア訪問（居住）の有無

次に、能登エリアを訪問したいかどうかについて、「訪問したい」を1、「したくない」は5、の5段階で記入を求めた（現在住んでいる人は、エリア外に住んでいると仮定

して、答えてもらった)。平均値は2.27と、比較的近距離であることもあり、一定の訪問意向を有していることを示す結果となった。

第4の質問は、どのような条件がそろったときに能登エリアを訪問したいと思うかを、以下の選択肢から複数回答で答えてもらった(図-3)。第1の質問でグルメに対する関心が示されていたことを反映してか、②を選ぶ回答者が多く、次いで①との結果を得た。

- ① イベントがある
- ② おいしいものが食べられる
- ③ 珍しいものを見ることができる
- ④ 交通の便がよい
- ⑤ その他

第5の質問では、能登エリアで知っている観光地を複数回答で挙げてもらった。最も多かったのは、のとじま水族館であった。次いで和倉温泉、千里浜なぎさドライブウェイ、白米の千枚田という結果となった(図-4)。

最後の質問は、前田利家が築城した小丸山城の跡地に整備された公園である、小丸山城址公園(七尾市)について尋ねた。公園の認知度については、「知っている」を1、「知らない」は5、関心の度合いは、「関心がある」を1、「関心がない」は5、訪問意向は、「訪問したい」を1、「訪問したくない」は5、の5段階とした。

それぞれの平均値をとると、「知っている」は4.25、「関心がある」は3.71、「訪問したい」は3.49、という結果となった。

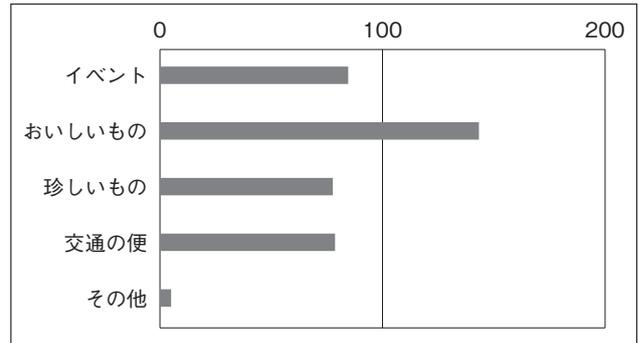


図-3 能登エリア訪問の条件

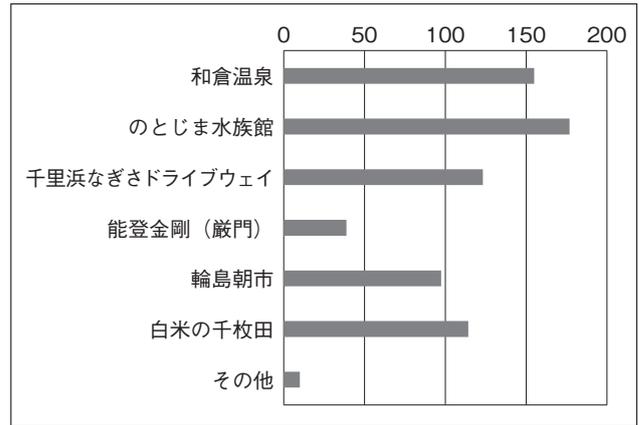


図-4 能登エリアで知っている観光地

#### 4. 考察

##### (1) アンケート結果から

表-1は、前節の質問1で示された関心の度合いと回答者の訪問意向との相関係数をとったものである。これらのうちで最も高い値を示したのが「自然」で0.479、次いで「観光」の0.433、「歴史」(0.342)、「グルメ」(0.329)、「温

表-1 能登エリアの訪問意向との相関

		訪問したい	グルメ	温泉	観光	自然	歴史
訪問したい	相関係数	1	.329**	.312**	.433**	.479**	.342**
	有意確率		.000	.000	.000	.000	.000
	N	201	201	201	201	201	201
グルメ	相関係数	.329**	1	.535**	.467**	.367**	.159*
	有意確率	.000		.000	.000	.000	.025
	N	201	201	201	201	201	201
温泉	相関係数	.312**	.535**	1	.517**	.421**	.177*
	有意確率	.000	.000		.000	.000	.012
	N	201	201	201	201	201	201
観光	相関係数	.433**	.467**	.517**	1	.589**	.347**
	有意確率	.000	.000	.000		.000	.000
	N	201	201	201	201	201	201
自然	相関係数	.479**	.367**	.421**	.589**	1	.393**
	有意確率	.000	.000	.000	.000		.000
	N	201	201	201	201	201	201
歴史	相関係数	.342**	.159*	.177*	.347**	.393**	1
	有意確率	.000	.025	.012	.000	.000	
	N	201	201	201	201	201	201

\*. 相関係数は5%水準で有意。\*\*. 相関係数は1%水準で有意。

表-2 能登エリアの訪問意向との相関

	「訪問したい」	関心の度合い(平均値)	知っている観光地の数
「訪問したい」	1	.528**	.154*
相関係数			
有意確率		.000	.029
N	201	201	201
関心の度合い(平均値)	.528**	1	.258**
相関係数			
有意確率	.000		.000
N	201	202	202
知っている観光地の数	.154*	.258**	1
相関係数			
有意確率	.029	.000	
N	201	202	202

\*. 相関係数は5%水準で有意。\*\*. 相関係数は1%水準で有意。

表-3 小丸山城址公園の訪問意向との相関

	歴史	関心がある	訪問したい
歴史	1	.427**	.430**
相関係数			
有意確率	.000	.000	.000
N	201	194	194
関心がある	.427**	1	.777**
相関係数			
有意確率	.000	.000	.000
N	194	194	194
訪問したい	.430**	.777**	1
相関係数			
有意確率	.000	.000	
N	194	194	194

\*\*. 相関係数は1%水準で有意。

泉」(0.312)の順となった<sup>(1)</sup>。

これらの各キーワードで示された関心の度合いの平均値、さらに能登エリアで知っている観光地の数と訪問意向との相関係数をとったのが、表-2である。関心の度合いの平均値との相関係数は、0.528と5つのキーワード全てを上回った。一方で、知っている観光地の数は0.154とあまり訪問意向との相関を見いだすことはできなかった<sup>(2)</sup>。本来、訪問意向が高ければ、それだけ観光地に詳しくなるはずであるが、逆に、あまり知らないことが、かえって旅行者の好奇心を喚起するという側面も否定しがたい。また、実際に現地を何度か訪れたことによって「飽き」が出てきた可能性も考えられる。訪問することで「また訪れたい」と再訪につながる場合もあれば、観光地によっては「一度訪問すれば十分」となる場合もあり、現地の観光事情に通じていることが、必ずしも訪問意向にプラスに作用するとは限らないといえる。

最後に、七尾市にある小丸山城址公園の訪問意向・関心と歴史への関心との関連について、検討した。歴史および小丸山城址公園への関心の相関<sup>(3)</sup>は0.427、歴史への関心と小丸山城址公園の訪問意向の相関<sup>(4)</sup>は0.430と、高いとまではいえないものの、一定の値を示す結果となった(表-3)。

## (2) 観光資源の集積

「自然」、「観光」、「歴史」、「グルメ」、「温泉」それぞれに一定以上の関心を示すほど、訪問意向も高くなるということは、旅行者に対して、これらの面でそれぞれある程度の魅力を提示できるかどうかが重要であると考えられる。つまり、多様な観光資源が集積していることが観光客の訪問意向喚起に有利となり、観光地への集客効果も期待できるといえそうである。

観光資源・施設で過ごす時間に限界代替率逓減の法則を仮定すると、観光客が複数の観光資源・施設を含む観光地を訪れた場合の効用関数Uは、図-5のように表すことができる<sup>(5)</sup>。

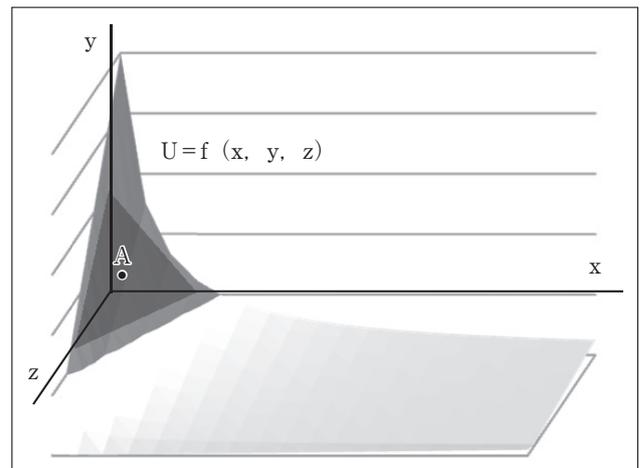


図-5 観光客の効用(観光資源3ヶ所の場合)

$$U=f(x, y, z)$$

x, y, z: 観光資源・施設X, Y, Zで消費した時間

旅行者が時間的制約T(図中の三角形の部分)に直面しつつ効用を最大化する時間配分は、効用関数  $U=f(x, y, z)$  とTとの接点Aとなる。つまり、旅行者は、可能な限りX, Y, Zにそれぞれ一定の時間を割り当てることが望ましいといえる。

ここで、旅行者が滞在先で複数の観光資源を訪問することを選択しないケースについて検討する。先ほど限界代替率低減を仮定したが、もし観光資源XとYが訪問目的において完全代替的、すなわち限界代替率が常に一定で右下がりの直線となる場合(図-6)、その効用を最大化する均衡点(この場合は点B)は、縦軸あるいは横軸上に位置すると考えられる。このケースにおいて、旅行者にとっては観光資源が複数あっても集積のメリットを直接的には享受できないことを意味する。

このことから、旅行者にとっては、旅先の観光資源が豊富であったとしても、それらが互いに代替的である場合、あまり意味をなさないといってよい。換言すれば、観光資源の集積が旅行者にメリットを提示し、集客効果を発揮す

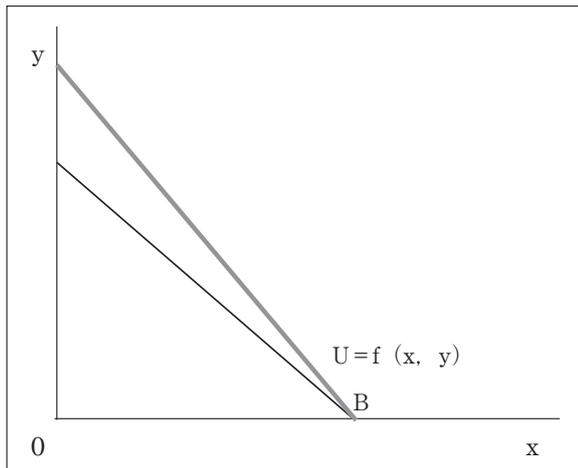


図-6 観光客の効用（完全代替の場合）

るには、それぞれの観光資源が互いに一定の補完性を有している必要がある。この「補完性」が、具体的に何を指すかが問題であるが、観光客にそこに「行く」というアクションを起こさせる「目的」（消費、体験、休養、学習など）ということになるのではないか。仮にそうであるとすると、旅行者の様々な目的が充足できるようにバランスよく観光資源が賦存していることが、その集積のメリットを生み出す条件の1つとなると考えられる。例えば京都などは、もともと寺社や博物館等の魅力ある観光資源が一定以上集積しており、国内の他の観光地に対して優位であるが、京料理など観光行動の選択肢も豊富であることで、より有利となっていると考えられる。

先のアンケート調査の結果から、潜在的旅行者の訪問意

向には、現地の観光事情に通じていることよりも総合的な関心の度合いの影響が大きいことが示唆された。観光地サイドとしては、こうした多様な関心に対応できるようなメニューを揃えることによって、当該地域への集客促進が実現できるかも知れない。とはいえ、安易にそのような方向性を志向することは、総花的で独自の魅力に乏しい観光地の形成につながりかねない。（他の観光地との）差別化とのバランスを保つことが求められる。

## 5. 今後の課題

当研究では、学生を対象としたアンケート調査の結果をもとに、相関分析等によって旅行（予定）者の訪問意向に影響を与える因子について検討した。結果として観光地の観光資源に熟知していることは、あまり訪問意向に影響を与えることはなく、「自然」、「観光」、「歴史」、「グルメ」、「温泉」等への関心の度合いの平均値が、調査結果においては訪問意向と最も高い相関を示す結果となった。小丸山城址公園の訪問意向は、歴史への関心との相関が比較的高かった。

しかしながら、調査対象が学生であること、具体的訪問先として能登エリアを指定したことなど、調査手法に伴う限界もあることは、否定できない。また、一般的には、周遊型の観光を志向する観光客は、観光資源の集積した観光地を選好する考えられるが、滞在型を好む観光客のそれは異なる可能性がある。今後は、周遊型と滞在型の違いにも着目して考察を深めたい。

## 【脚注】

- (1) 回答者の学年と訪問意向との相関係数もとってみたが、結果は-0.062と、あまり関連は見いだせなかった。
- (2) この点に関して、訪問意向については、「訪問したい」を1、「訪問したくない」は5と設定した。うっかりと意向が弱いほど大きな値としてしまったため、知っている観光地の数との相関は、プラスの値をとっているものの、実際には負の相関である。が、いずれにしてもあまり相関は見いだせないことには変わらない。
- (3) 他のキーワードとの相関係数は、「グルメ」(0.137)、「温泉」(0.183)、「観光」(0.213)、「自然」(0.358)であった。
- (4) 同様に、「グルメ」(0.216)、「温泉」(0.253)、「観光」(0.251)、「自然」(0.390)。
- (5) ここでは、観光資源・施設X, Y, Z間の移動時間をゼロとしている。現実にはそのように複数の観光資源・施設が隣接していることは寧ろ例外的であるが、単純化のためにそう仮定した。

## 【参考文献】

- 1) 八城薫・小口孝司(2003): 観光地選好に及ぼす個人的原風景と心理学的個人差, 観光研究, vol.15(1), pp.28-29
- 2) 内閣府(2003)「自由時間と観光に関する世論調査」
- 3) 橋本俊哉(2013): 観光回遊行動(橋本俊哉「観光行動論」原書房), 制度, 東京大学出版会, pp.105-119

